

# フロントランナー

(b1面から続く)

## 「私の医療行為に原発の善悪は関係ない」

### 寺沢 秀一さん 福井大学医学部教授

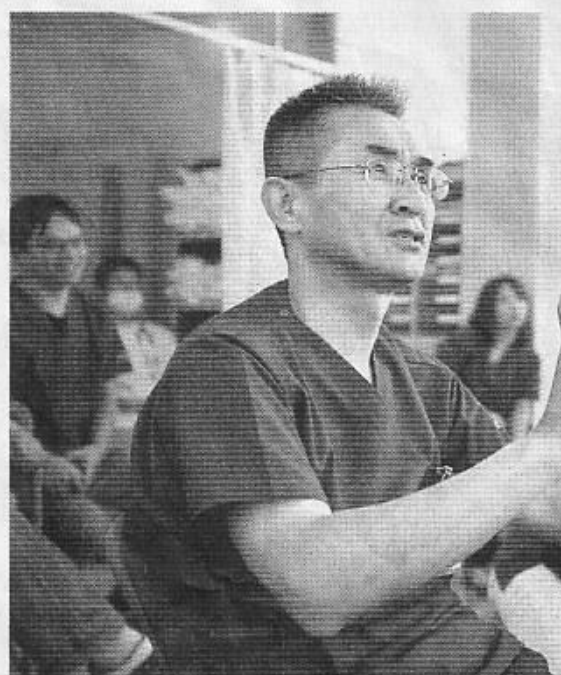
「原発事故後に福島へ入るとき、放射能への恐怖はまったくなかったのですか。」  
 高い線量の被曝をした患者を診るかもしれない、という緊張感はありませんでした。でも、どんなに重症であろうと、治療する医師がひどい汚染、被曝をすることがないことは被曝医療を学んで知っていました。空間線量は気にするようにしていましたが、原発の内部に入ると言われたわけではない。むしろ福島入りするときに乗ったヘリの方が怖かった。福井の医師が患者を搬送するためにヘリに乗ったときも、「落ちないでくれ」と祈りました。混乱時のヘリは危険だと思いましたが。

#### 「院長命令」

「なぜ、そんなことが起こったのでしょうか。」

「放射能は見えないし、臭わないし、ましてや被曝医療なんてなんだかよく分からないから怖い」ということだったのでないでしょう。そんな事態を防ぐため、文部科学省の「科学技術戦略推進費」を使って、福井大に養成コースを設置したのである。

「福島に行くのを嫌がった医療関係者もいたと聞きます。福島の病院も被災し、放射線を測定するクリーニングをできる人が、全く足りませんでした。」「宮城や岩手に行くのはいいけど福島はちょっと……。」という医療チームが全国にあったといいます。知り合いの医師が、私に電話をしてきて「福島にチームで入ろう」としたら、看護師が泣き出してしまった」と話していました。



患者の情報を共有するカンファレンスでは、若手医師をほめつつ、助言する＝福井県永平寺町

が講師となり、医療関係者向けの被曝医療の講習会を開いていました。しかし、参加者の中には「院長命令で来ただけ」と、興味を示さない人も多かった。原発は絶対に事故を起こさないという安全神話のせいもあったのでしょうか。事故後は、被曝医療に興味を持つ医療関係者が増えたそうです。

「医師以外も、被曝医療について学ぶ必要があると提案されています。」

事故当初、救急車は福島原発から20km圏内には入らず、東京電力の車が患者を搬送していました。7月に福島第一原発内に救急医療室ができ、医師、看護師、放射線技師が常駐するようになった。その状況は変わりません。

米国では、医師だけでなく、看護師、消防、警察なども被曝医療の研修に参加しています。災害が起こった時、はじめに救護にあたる人たちです。誤解しないでほしいのは、「医療関係者は被曝の恐れを顧みずに対応しろ」と言っているわけではありません。医療関係者が救援に行くかどうかを自分で判断する知識を持つていないことが問題だと言っているのです。

#### 現場の裁量

「福島に入っただけで、放射能が体の表面についた人の全身を除染する基準値を大幅に引き上げました。」

原発内の作業員への対応だけでなく、住民への被曝医療態勢をどうするか、県にアドバイスするのも私の役目でした。従来の日本のマニュアルでは全身を除染する場合は、体表面についた放射線の基準が1万3千cpm(1分間に検知した放射線の数)でした。放射線専門家や医師と話し合い、これを10万cpmに引き上げるよう福島県に進言しました。1万3千以上10万cpm未満が検出された場合は、拭き取り除染としました。

「国際基準とはいえ、リスクは感じませんでしたか。」  
 当時、全身除染のための水が不足し、気温も低かった。県外に搬送しようにも、マンパワーも足りない。日本の基準に合わせたままにしていたら、「あなたは除染しないといけない」と宣告されながら、何日間も放っておかれる人が大量に発生し、パニックになっていたと思います。たとえば、水が確保できても、あの気温の中で服を脱がせて水をかければ、高齢者は脳血管疾患や心臓病で亡くなる人が出るかもしれない。放射線の健康被害と除染による被害、どちらが住民にとって大きいのかを、限られた条件の中で判断しました。

「周囲から抵抗はありませんでしたか。」  
 国の原子力安全委員会は当初、賛成できないという意見を出したそうです。福島県もかなり悩んでいました。最終的には、原子力安全委員会も3月19日に基準を10万cpmにすることを認めました。マニュアルを変える抵抗感は分かりますが、非常時はもう少し現場の裁量を認めるような何かがあった方がいいかと思っていました。

「原発自体について、賛成ですか。反対ですか。」  
 実は、親しい医師に「被曝医療なんてやるな」と言われたことがあります。「そんな可能性の低いこと意味があるのか」ということと、「原発に賛成していると思われ」という思いからだったそうです。

「私は原発への賛否を考えたことはありません。私の医療行為に原発の善悪は関係ありませんから。現実として日本に原発があり、100%事故が起こらないとは誰も言えない。原発に反対だからといって、助かる命が救えないなんてことが、医師にあってはならないと思うだけです。」

### プロフィール



- ★1952年3月生まれ。福井県あわら市(旧金津町)の農家に生まれる。
- ★すり傷から外科手術まで何でもこなす親類の開業医に憧れ、金沢大学医学部に進学＝写真。小さい頃に脱腸や盲腸など手術を5回受け、泣いてばかりだったので、家族は「気持ちも体も弱いから医者は無理」と反対した。
- ★77年、沖縄県立中部病院で研修。カナダ・トロント大学病院に留学し、あらゆる患者を受け入れる北米型救命救急室(ER)を学ぶ。
- ★83年、福井県立病院に開所した救命救急センターに勤務。恩師で元沖縄県立中部病院長の真栄城優夫さん(80)は「彼は沖縄だけでなく日本の財産。彼ならば、当時まだ低かった本土の救急レベルを上げてくれると思った」。
- ★2011年、ER普及への尽力で救急医療功労者厚生労働大臣表彰。
- ★年間約8千人が新たに研修医になる中、同僚の医師と書いた『研修医当直御法度』(96年出版)は、毎年5千部以上売れるベストセラー。
- ★家族は妻、娘3人、孫娘3人。

◆次回は、日本でも200店舗以上を展開するファッション界の重鎮、英国人デザイナーのポール・スミスさんの予定です。